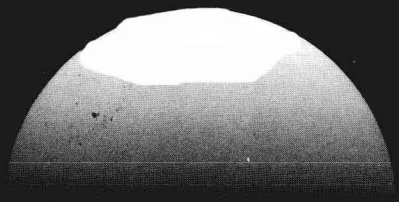
小説太平洋戦争

2

山岡荘八

小説太平洋戦争

南太平洋の死闘



講談社

新装版
小説太平洋戦争 2 南太平洋の死闘
昭和五八年八月五日第一刷発行

定価七八〇円

著者—山岡荘八 © 一九八三 藤野稚子 Printed in Japan
発行者—加藤勝久
発行所—株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一 郵便番号一一二 電話東京(〇三)九四五—一一一一(大代表)
振替東京八—三九三〇
印刷所—豊国印刷株式会社 製本所—株式会社国宝社
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

ISBN4-06-187272-9 (0) (文二)

小説太平洋戦争

2

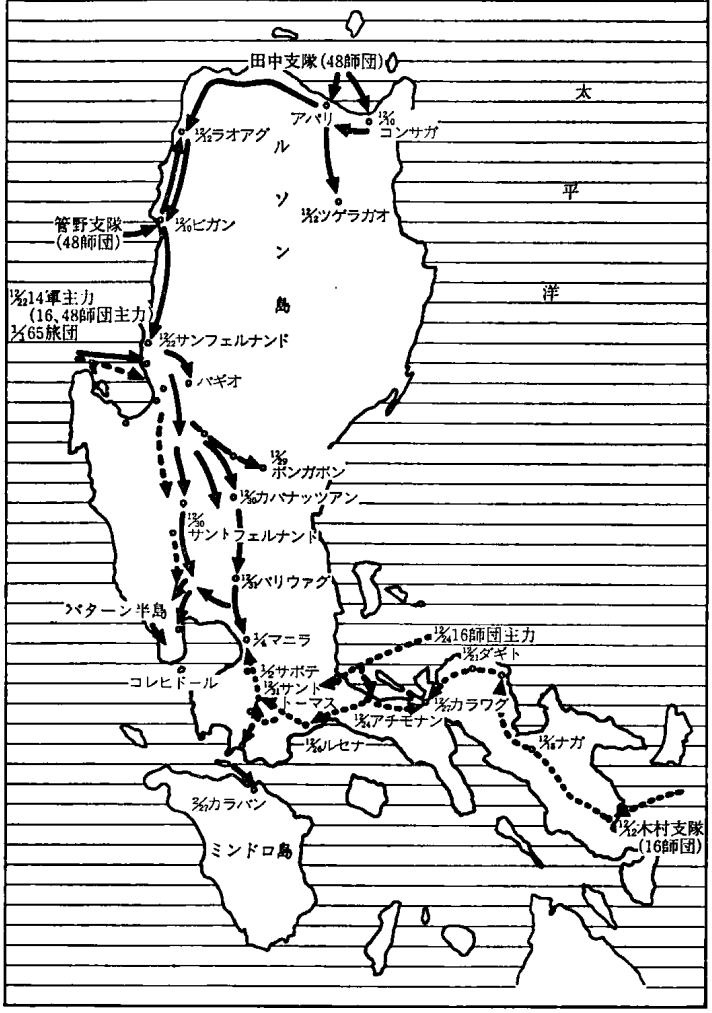
●南太平洋の死闘——目次

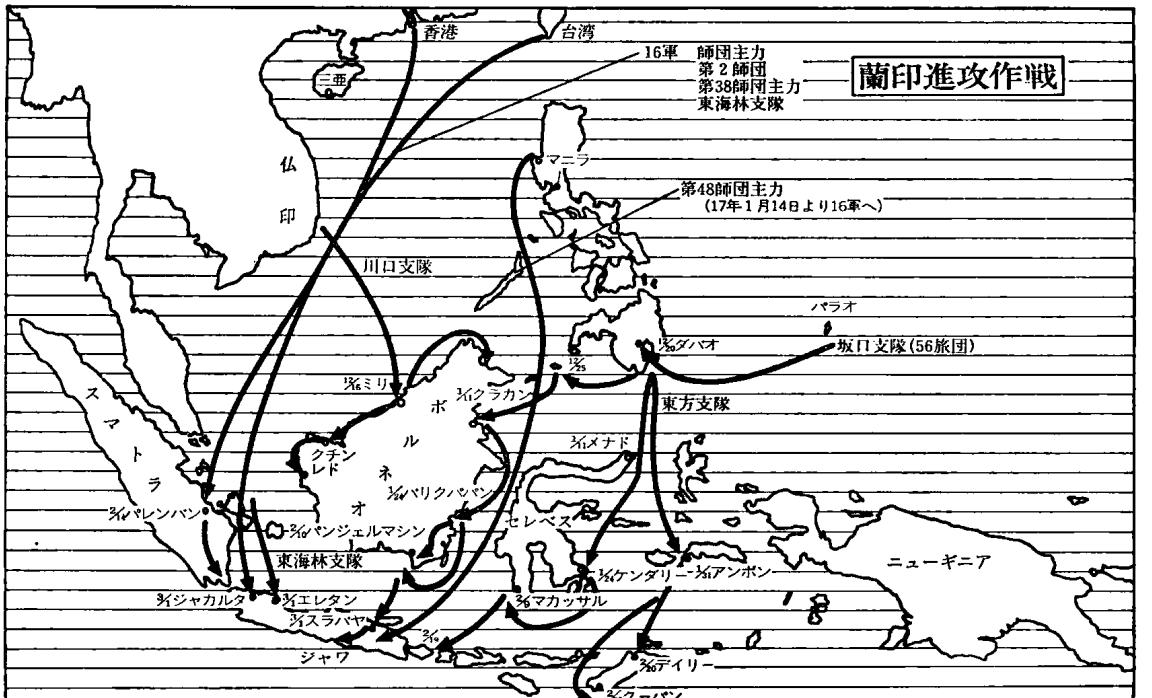
フィリピン進攻作戦 11
比島緒戦の大悲劇 30
バターン死の行進 50
コレヒドールの勝利 70
蘭領印度の攻略戦 90
蘭印に皇軍あり 110
ジャワ軍政の成功 129
日本陸軍の解剖 149
ミッドウェー海戦㈠ 168

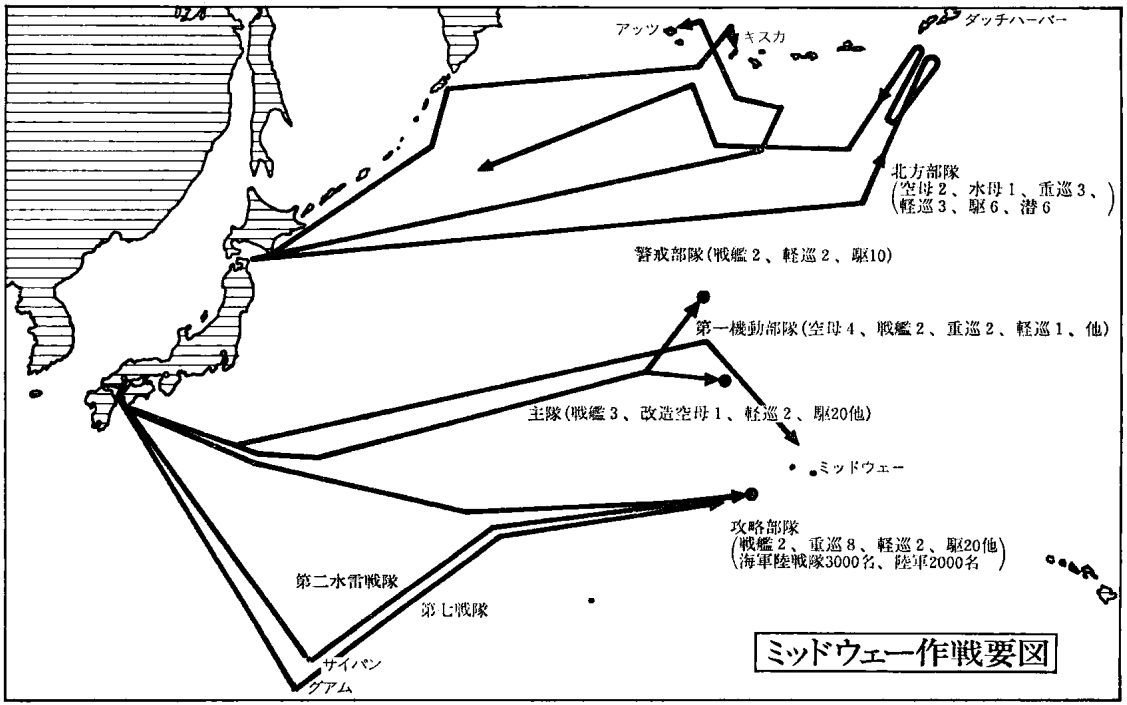
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

ミッドウェー海戦(二) 188
ミッドウェー海戦(三) 208
ミッドウェー海戦(四) 228
ガダルカナルの死闘(一) 246
ガダルカナルの死闘(二) 266
ガダルカナルの死闘(三) 286
ガダルカナルの死闘(四) 304
ガダルカナルの死闘(五) 324
ガダルカナルの死闘(六) 342

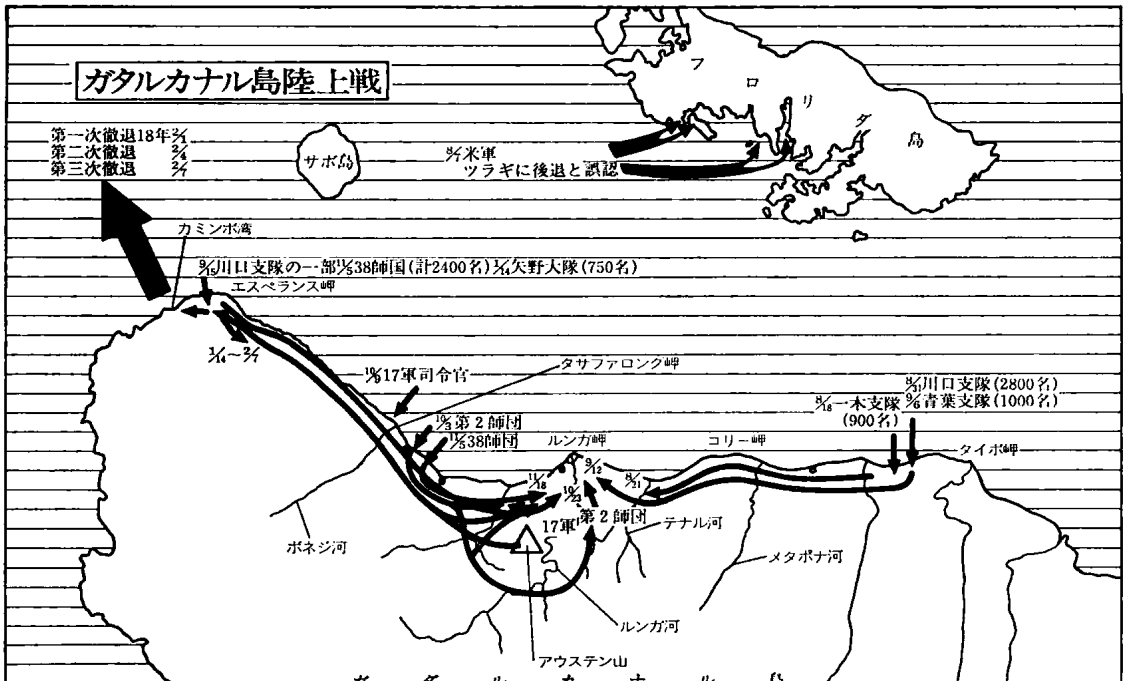
フィリピン作戦経過図


田中支隊(48師団)
太
平
洋
アパリ
12/10
コンサガ
12/12ラオアグ
ルソン島
12/22ツゲラガオ
管野支隊
(48師団)
12/10ビガン
12/22 14軍主力
(16、48師団主力)
1/6 65旅団
12/23サンフェルナンド
バギオ
12/30
ボンガボン
12/30カバナッツアン
12/30
サントフェルナンド
12/27バリウァグ
バターン半島
1/4マニラ
12/24 16師団主力
12/21ダギト
コレヒドール
12/2サボテ
12/21サント
トーマス
12/27カラワグ
12/4アチモナン
12/10ルセナ
12/8ナガ
3/27カラバン
ミンドロ島
12/2木村支隊
(16師団)


蘭印進攻作戦
香港
台湾
三亜
仏印
16軍　師団主力
第2師団
第38師団主力
東海林支隊
マニラ
第48師団主力
(17年1月14日より16軍へ)
川口支隊
パラオ
坂口支隊(56旅団)
1/20ダバオ
1/25
東方支隊
1/6ミリ
1/4クラカン
ボルネオ
クチン
レド
1/4メナド
1/24バリクパパン
1/14パレンバン
1/10バンジェルマシン
セレベス
東海林支隊
1/24ケンダリー
1/31アンボン
ニューギニア
1/4ジャカルタ
1/4エレタン
1/4スラバヤ
2/6マカッサル
2/14
ジャワ
2/20デイリー
2/20クーパン
スマトラ


アッツ
キスカ
ダッチハーバー
北方部隊
(空母2、水母1、重巡3、
軽巡3、駆6、潜6)
警戒部隊(戦艦2、軽巡2、駆10)
第一機動部隊(空母4、戦艦2、重巡2、軽巡1、他)
主隊(戦艦3、改造空母1、軽巡2、駆20他)
ミッドウェー
攻略部隊
(戦艦2、重巡8、軽巡2、駆20他
海軍陸戦隊3000名、陸軍2000名)
第二水雷戦隊
第七戦隊
サイパン
グアム

ミッドウェー作戦要図



資料／「公刊戦史」・「日本の戦争」（原書房）

装幀　小松桂士朗
装画　北　蓮蔵
挿絵　田代素魁(光)

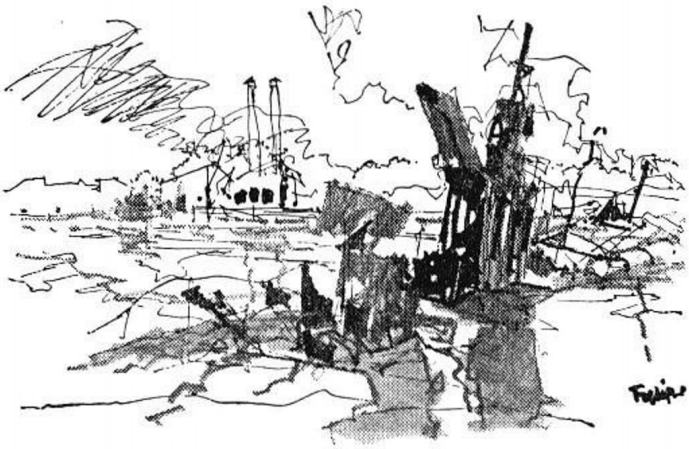
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

小説太平洋戦争

2

南太平洋の死闘

この小説における国名、地名、関連する事件、事変等の記述はすべて当時の一般的な呼称に従ったもので、本書は昭和四十年から四十六年にかけて刊行された原本をそのまま復刻したものです。



フィリピン進攻作戦

1

作戦目標をフィリピン攻略においた第十四軍の編成が、第十六、第四十八の二個師及び第六十五旅団と第五飛行集団とから成っていたことはすでに書いた。

この兵数は、マレー攻略をめざす第二十五軍、蘭領インド攻略をめざす第十六軍にくらべて、一個師団兵力が少くなっている。

そもそも陸軍部隊の南進の終局の目的は、蘭印の石油確保にあるのであり、アメリカの石油禁輸が描き出させたこの大戦争の中で、常識的に考えると、何故この方面の兵力を、他の二方面よりも

軽視したのか甚だ判断に苦しむところだ。
このあたりにわが参謀本部の作戦の深慮を欠いた主客顚倒の安易さがまざまざと露呈している。
マレー作戦が、東方からするイギリス勢力の進力を断つためであったのと同様に、フィリピン作戦は、西南太平洋でアメリカの進出を断々乎として排除しなければならないこれは扇の要にあたっている。
いったい参謀本部の戦争導指者たちは、開戦時のイギリスとアメリカの戦力比較を冷静にやってみたことがあるのだろうか。
当時のイギリスは散々にドイツのためにたたかれ、有無を云わずアメリカを参戦させるのでなければ、絶望の状態に追い詰められてあったと云ってよい。
ところがアメリカはどうであったろう。まだ全く無傷のまま、ひたすらに参戦の機会をうかがっていた敵側全体の希望の中心なのでは無かったか。
海軍の戦は海軍の戦として、陸軍はいち早くこを裁定し、他人の手をかりず、永遠に自立出来るぐらいの一大要塞化の構想と決意をもってのぞむべきであったのだ。
ところが彼等はただに一個師の兵力差をつけただけではなく、ここに彼等自身、文弱な外交官型の軍人として、内心では必ずしも尊敬してはいなかった本間雅晴中将を軍司令官に選んだ。
本間雅晴中将は、マレー軍司令官の山下奉文中将とは、極端に性格も趣味も違っていた。
一方がどこまでも日本的風格の古武士タイプであるのに引きかえて、一方は、ヨーロッパ風の教養をもって誇りとする所謂文化主義者的タイプの軍人だった。
一方は、その要求がたとえどのように無理であっても歯を喰いしばって挑みかかる型であり、一方は不可能は不可能とハッキリ云ってはばからない型であった。
この二人とも日米開戦には反対だったのだが、それはここで深く触れる必要はあるまい。実は天皇も東条も、極力避けようとした戦だったのだ

が、ルーズベルトやハルやヒットラーやチャーチルがこれを許さなかっただけなのだ。そのことがハッキリして来た以上、日本の一軍司令官の意志などさして問題にしてもはじまるまい。

ただ、陸軍首脳部の情勢判断の甘さと錯誤とが、この洋風紳士も日本型猛将も、後には共にフィリピンで銃殺刑と絞首刑という、ひとしく悲惨な処刑で生命をおとさせた……そのことだけを記憶に刻んでおけば足りるであろう。

本間雅晴は、佐渡の生れであった。彼は中学生時代から文学にあこがれを持っていたという。士官学校も陸軍大学校も、蘭領インド攻略の第十六軍司令官に選ばれた今村均中将につぐ秀才で、陸大の教官、イギリス駐在武官等の勤めが長く、実戦部隊の勤務は少かった。

彼は秀才であることと、洋風紳士であることと、そしてある家庭的な不幸な出来ごとによって陸軍部内では有名だった。

彼の最初の夫人は、彼の溺愛を裏切って、彼がロンドン駐在の留守中に若い男と出奔のうえ同棲して、しかも良人に手切金を要求したという……

彼はその夫人を忘れかねて、いろいろ手を尽して翻意をせまったものらしい。

「——何という未練な奴だ。それでも貴様は軍人なのか」

彼の媒酌人であり、郷里出身の大先輩でもあった鈴木操六大将が、呆れて怒鳴りつけたというのだから軍人としては明治期に無かった一種の変りだねであったろう。

「——ボクは、世間の笑いものになっても構わん。どうしてもあれに帰ってほしい」

しかしすでに他の男と同棲している夫人は帰ることを承知しなかった。そこで彼は、彼女の要求するままに手切金を渡してやって別れたというのだから天晴れであり、同時に如何に大正期の軍人とは云え、部内で有名にはなる筈だった。

彼は十一月十日、陸軍大学校ではじめて陸海軍合同の作戦会議を開く前に、参謀本部の杉山大将に呼ばれて総長室で内命を受けとった。

すでにそこには山下奉文と今村均は先着してい

て、彼等の用は済んでいた。
杉山大将は例の調子で、簡単に鉛筆で線の引かれたフィリピンの地図をひろげ、
「――マニラの攻略は、作戦行動を起してから五十日以内に」と云いだした。
本間は、神経は細かったが躰軀は堂々としている。彼はすぐさま杉山をさえぎった。
「――待って下さい。そう簡単には行きません」
「――むろんここに相当数の敵機が居る。この方は飛行集団に叩かせるとして……」
「――いや、順序が反対ではありませんか。先ず敵の勢力を調べたうえで、幾日位で落せるかは、私の方から目算を立てます。敵の勢力が不明なのでは五十日か三十日か見当のつけようがありません」
本間は、日本の陸軍が、いまだかつてアメリカの陸軍を相手にして戦う場合など、考えてみたこともないのをよく知っている。
今までのところでは、せいぜい海軍が事を起した場合、その手伝いをする意味で、一個旅団ぐらいは派遣しなければ済むまいという程度の片手間のものであった。
「――いや、その点は心配ない。軍参謀長として前田少将がついてゆくし、最近田村大佐もいろいろと調べている」
「――と云いますが前田少将のは大尉時代の智識ではありませんか。大正時代と、昭和十六年ではだいぶ違うと思うのですが」
云われて杉山は、しぶい顔をして黙りこんだ。
「――今年の夏までは比島攻略など陸軍は夢想もしてみなかったのでしょう。とにかく敵の守備兵力がわからなければ、何日でマニラを攻略するなどというお約束は困難です」
こんなことの云えるのは本間だけであった。これは確かにヨーロッパ好みの合理主義である。日本式に云えばそれほど心配ならば、直ちに自分の手で調べあげようとするのでなければ無責任ということになる。
「――困難は君だけのことではない！」
案のごとく杉山は怒りだした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo